

「トロッコ」を読んで

鈴木 タエ子

大人に翻弄され死ぬほど怖い思いをする八歳の少年。良平の体験を通して人生の厳しさや生き難さ、信じることの難しさについて考えさせられた。しかしまた、報われる努力のあることに想いが膨らんだ物語でもあった。

念願が叶い、二人の土工と一緒にトロッコを押す事ができた良平。トロッコに憧れ続けてきた良平にとって夢が実現した日である。

上り坂ではトロッコを押し、下り坂ではトロッコに乗り込みスピードを満喫する。土工の優しさを信じて疑わない良平が、嬉々としてトロッコを楽しむ姿が目に見えよう。

その喜びを象徴するように、陽を浴びて輝く蜜柑畑も描かれている。だが、光当たれば影が出来るように、トロッコ押しは良平に生涯忘れることの出来ない恐怖を与えることになる。トロッコは、あまりにも遠くに来てしまった。日が陰りはじめても帰る風のない土工に、良平の心は徐々に不安になっていく。

その土工はといえば、のんびり茶店から出て来て、「もう帰んな。

おれたちは向う泊りだから」と事も無げに言い放ったのである。

一緒に帰るものとばかり思っていた良平にとって、まさに青天の霹靂である。泣きたい気持ちを堪え「命さえ助かれば」の一心で駆け出した。喜びを得た代償でもあるかのように、草履や袴を脱ぎ捨てて走り続けた。やっと我が家に辿り着き大声で泣き出す良平。抱えてくれた母の腕の中では、何を問われてもただ手足をばたつかせ泣くだけであった。

それから十八年後、良平は妻子を連れて上京、ある雑誌社の校正係として働いている。

今でも、その時の事を度々思い出す。トロツコを押すのを快く引き受けてくれた二人の土工。良平を邪魔者扱いせず一緒にトロツコを押させてくれ、お菓子までくれた。優しい人たちだと思う。だが、彼らはそれと気付かずに無責任であり想像力を欠いていた。八歳の少年が日の暮れた長い線路道を、たった一人で帰らなければならぬということが、どんなに恐ろしく心細いことなのかを思い遣れなかった。さらには、相手を裏切り傷つけてしまったという認識もなく、自責の念に駆られ苦しむということもない。今、良平は「疲れた身体」でその時のことを思い出している。

大人になってからも似たような経験をしているのに違くない。相手の好意に甘えたら、とんでもない結果が待っていたなどの苦い経験が、八歳の時の怖い思い出へと誘っているのではないだろうか。これまでも人生の厳しさを少なからず体験しているものと思われる。今の良平は責任を持つべき家庭を持ち、社会人として働いている身である。責任を持つ身になればなるほど、現実の厳しさに身を詰まされることも多いであろう。振り返って見れば、あの線路道は人生そのものようである。汗をかいて坂を登り通さなければ、楽な下り坂には到達できない。「塵勞に疲れた彼の前には、今でも薄暗い藪や坂のある道が細々と一すじ断続している」、この言葉で物語は終わる。著者、芥川龍之介の心の内が垣間見えるような一説である。それはまた、人間関係に疲れ人生にさえも疲れてしまった良平の姿をも連想させる。だが、人生の厳しさに耐えながら生きるのは何も良平に限ったことではない。以前、紙上で目にした流行脚本家の言葉を思い出す。「人生は一つ嬉しいことがあると何倍もの辛いことが待っている」と語っていた。売れっ子のその人でさえそうなのだ、と当時慰められた記憶が蘇る。著者にも同じ想いがあるからこそ、決して平坦ではない道を描い

ているのではないだろうか。

だが、道は示されている。そのことを見逃してはならない。道を描いた著者の心情に読む者の心が動かされる。この道は、厳しい現実に救いを与えるように著者が必死に探し求めた道に思われなければならない。責任を持って生きるということには厳しさが伴う。どんなに厳しくても取り敢えずは目の前の道を進むしかないのだ。この道には、折れそうな気持ちと懸命に闘っている読者への励ましを感じる。

頑張って突き進めばその先には何かが待っている、という希望がある。藪や坂のある道なればこそ進む価値がある、という想いも伝わってくる。ここに、気持ちを必死に奮い立たせている著者の姿が重なるのである。

八歳の良平には、あの線路道の先に確実に自分を守ってくれる父母が待っていた。家庭を持ち、守られる立場から守る立場へと変わった今、良平はどんな想いであるのかを思い浮かべているのか。どんなに険しくてもこれからの人生、良平は守らなければならない人のために突き進んでいくのに違いない。

どんな人生にも無駄は無い、と言われる。

良平が死ぬ思いで走ったあの体験は、いずれ生かされるであろう。たとえ今は疲れ切つていても。困難が大きければ大きいほど、乗り越えた後に得る幸福の実感度は高い。この当たり前のことを良平もいつか必ずや感じ取ることができる、と「道」が教えている。